

千有^あ一^ひの城^{しろ}堞^{たて}は分配^{ぶんぱい}せしむる部^ぶ伍^ごも^も一^ひの^べ城^{しろ}上^のの^う人^{ひと}或^{ある}ハ^ハ疎^そ或^{ある}密^{みつ}或^{ある}ハ^ハ人^{ひと}の上^{の上}に^に人^{ひと}ら^ら肩^{かた}と^と背^せと^と磨^ひる^る合^あひ^ひ或^{ある}ハ^ハ數^{かず}の^の塚^{つか}は^は一^{ひと}人^{ひと}も^も無^なき^きも^も有^ある^る々^々々^々衣服^{いふく}と^と乙^{おつ}密^{みつ}基^{もと}の^の近^き邊^へ乃^も松^{まつ}樹^{じゆ}間^まに^に掛^かけ^け疑^ぎ兵^{へい}と^と名^な附^つた^た江^えと^と隔^へて^て敵^{てき}軍^{ぐん}を^を望^{のぞ}み^み見^みる^る小^こ左^さ程^{ぢやう}大^{だい}勢^{せい}と^とハ^ハ見^みえ^えら^らげ^げる^る東^{とう}大^{だい}院^{いん}の^の岸^{きし}上^{の上}に^に一^{ひと}字^じ陣^{ぢん}と^と排^{はい}作^{さく}陣^{ぢん}と^と張^{ちやう}列^{れつ}わ^わて^て紅^{こう}白^{はく}旗^{かき}を^を堅^かじ^じら^らし^しも^も恰^さも^も朝^{あさ}鮮^{せん}國^{こく}の^の挽^ひ章^{ぢやう}の^の如^{ごと}く^く一^{ひと}挽^ひ章^{ぢやう}ハ^ハ死^しと^と送^{くわ}る^る時^{とき}其^{その}人^{ひと}の^の德^{とく}行^{ぎやう}と^と迷^まつ^つ其^{その}中^{その}に^に十^{じゆ}餘^{じゆ}騎^きと^と出^でる^る羊^{じやう}馬^ば牆^{ぢやう}に^に向^むつ^つ江^え中^{なかつ}に^に騎^き入^いり^りけ^ける^る水^{みづ}深^{ふか}く^く馬^{うま}腹^{はら}は^はむ^むさ^さひ^ひに^にぼ^ぼた^たる^るハ^ハ皆^{みな}縛^{ばく}と^と接^{けつ}つ^つ列^{れつ}に^に立^たつ^つ將^{しやう}は^は江^えと^と渡^{わた}ら^らむ^むの^の状^{さま}と^となり^り其^{その}餘^{その}江^えの上^{の上}に^に小^こ往^{わう}來^{らい}

者^{もの}或^{ある}ハ^ハ一^{ひと}二^{ふた}人^{にん}連^{れん}れ^れ或^{ある}ハ^ハ三^{さん}四^し人^{にん}ア^ア何^{なに}れ^れも^も大^{だい}劔^{けん}と^と持^もた^たし^し目^めの^の光^{ひかり}も^も閃^{ひら}々^々恰^さも^も電^{でん}の^の如^{ごと}く^く或^{ある}ハ^ハ人^{ひと}云^いふ^ふ真^ま劔^{けん}は^は石^{いし}の^の木^きと^と以^もつ^つて^て之^{これ}と^と作^さら^らる^る小^こ白^{はく}蟻^{あぎ}と^と沃^おけ^けて^て人^{ひと}の^の眼^{まなこ}と^と眩^{くら}ひ^ひを^を持^もつ^つて^て江^え邊^へに^に來^きり^り城^{しろ}に^に向^むつ^つて^て放^{はな}ち^ちら^ら一^{ひと}の^の其^{その}聲^{こゑ}甚^{こゝろ}し^しと^とも^も一^{ひと}丸^{まる}江^えと^と過^かつ^つて^て城^{しろ}に^に入^いる^る遠^{とほ}き^きもの^のは^は大^{だい}同^{どう}館^{かん}に^に入^いり^り丸^{まる}の上^{の上}に^に散^ちり^り落^おつ^つ其^{その}間^{その}幾^{いく}千^{せん}餘^{じゆ}歩^ぽと^と云^いふ^ふ或^{ある}ハ^ハ城^{しろ}樓^{ろう}の^の柱^{しら}の^の中^{なかつ}に^に深^{ふか}く^く入^いり^り事^{こと}す^す及^{およ}ぶ^ぶ又^{また}敵^{てき}の^の紅^{こう}の^の衣^い装^{さう}一^{ひと}の^の者^{もの}練^{れん}光^{くわう}亭^{てい}の上^{の上}に^に何^{なに}れ^れも^も會^{かい}座^ざせ^せと^と將^{しやう}帥^{すい}た^たる^ると^と知^しり^り鳥^{とり}銃^{じゆう}と^と挟^{くわ}み^み邪^{じや}睨^にて^て走^{はし}り^り進^{しん}み^み渚^{しよ}の^の沙^さの上^{の上}に^に至^{いた}り^り丸^{まる}と^と放^{はな}つ^つ小^こあ^あや^やま^ま

以亭上の二人の中なる然も遠き故に重く傷つるに
 軍官姜士益や云者防牌の内より片箭の長さ一尺五寸
 の如くを放つ時片箭計速く飛ひ行極の木の指に残る朝
 鮮の長を以てあれと射さむ矢遠く飛て沙の上及ぶ
 紅衣の者遠巡さる却る元帥金命元善く射る者下知
 して快船を来せ中流に敵と射させたる此快船稍東
 の江岸に近くなれを敵又退き避く朝鮮軍の船上より
 字鏡の字と刻を發ちる箭の大で椽の如くたるが江
 と打越しけり日本勢各仰ぎ視て皆啼きのりる箭の
 地に落たるを争ひ聚りてこれと觀る是則兵船と整へ

さるを以て工房の吏一人を斬る時久く雨ふる江
 日縮る曾ち宰臣とち遣り一と檀君名ハ王儵朝鮮
 大白山檀木の下に降る國人立てて國を箕子殷付王
 朝鮮と号し平壤は都に唐堯の時在り立てて朝鮮の
 也周武王殷を克ち箕子中國人五千人を率めて朝鮮
 る武王乃箕子と朝鮮を封じ平壤は都に是の朝鮮と
 云民を礼義田東明王姓は高名は朱蒙高句麗の帝は
 蚕織作を教ふ唐將と中路に出迎りて從事官洪宗禄
 心柳成龍ハ唐將と中路に出迎りて從事官洪宗禄
 晋と城と出夜深けり順安に至りて路中より李陽元
 事金建睦の洛陽より来り小逢ふ日本勢已に鉄嶺に至り
 ゆる由と聞く鉄嶺ハ咸鏡道安邊府の内有る加藤清公
 一鉄嶺近來り西王子と捕り北地と悉く攻伐て南地一志
 たりと云ふ也翌日肅川を過り安州に至り平安道より成

龍の過遼東の鎮撫林世祿又來了對面して洛文軍門の書付
 る處也遼東の鎮撫林世祿又來了對面して洛文軍門の書付
 と請取了行在一送るその翌日國王既小寧邊と出て博川
 泊りし間て成龍も馳て博川に詣りし間て成龍ハ
 出立て大定江の邊に到りし日巳西に傾きぬ遂に後
 と回望られを廣通院の野に散卒絡得來る有る扱ハ平壤
 も守りて失ひたると云々疑々軍官救革として馳往て
 此者共と聚めさせたるに十九人と得て來る乃義州龍川
 等の處に軍卒より平壤に往て江灘と守り居たる者也此
 者共言昨日六月十敵已に王城灘より江を渡り江上と守
 りし軍兵大崩りよかり兵使李淮德遁れ走りしと云成

龍大に驚き即ち路中に書状と認め軍官崔先之と馳て行
 在に報せしむ夜嘉山郡に至るは是日夕内殿博川に至れ
 ると聞く蓋し是ハ路より敵兵清江巴に北道一攻入りぬ
 と聞えし故先之は行き引回されし間と聞えたる平壤
 陥りしを聞えしは國王ハ嘉山小止りし世子ハ博川
 より山郡に入られぬ

朝鮮征討始末記卷之三終

210.4
4

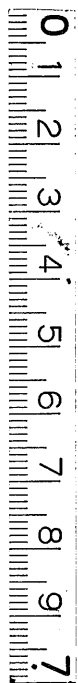
草魚石文書
卷之三

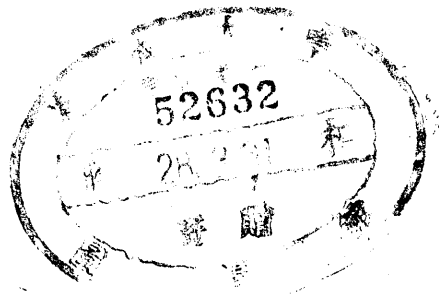
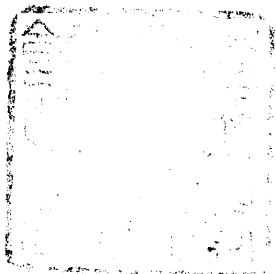
七

正寶
朝鮮征討始末記

四

210.4
5





朝鮮征討始末記卷之四

對州

山崎尚長 輯
村一善 校

小西行長等乘取平壤城之事

日本 六月十四日夜明、朝鮮の軍勢潛り大同江と船より渡り、遂に江岸の日本の陣に仕寄せ喚び叫びて攻込たり。小西が勢は前後も知らず伏し居たり。驚き騷ぐ處に朝鮮勢もさへひらいて第一の陣と突く由断るる事なれば、思ひ掛なく一陣突立ち、第二の黒田陣より黒き馬に乗るる武者衆を抽んで退散し、馳来り河邊より朝鮮人

と引組し討留たる左も剛強の働烈き圍戦なり此武者ハ
甲州長政なりと後々聞えて各賞譽せり諸陣の兵尋で到
る小西が勢左右不開きて鉄砲を以て打ちつる朝鮮勢四
度路よ見ゆる處と本は鎗いつ提け突て入息と徒々せ
ハ攻戦ふ宗義智ハ敵の後ろよ廻つて中よ取つてめ無二
無三小攻立てくれハ朝鮮勢立つ足もれ敗走しつる
江邊よ馳せ行く船は残る居たる者共是を見れば助け乗
せしむもせび船と漕ぎ返り狼狽城よ逃歸れば逃来る者
ハ船よ乗る事も叶ふ後ろよりは和兵透き間なく追掛
る敗卒ども足も地よ附べ宙と飛びて江中よ走りて溺

死し又ハ討取られけり中も足もや逃ぐのびる残
卒共淺瀬よ我方死しと押涉つて城中へ逃入けり日
本勢走を見て淺瀬ハ彼所ぞと各恰ひ夕陽よ及びり
も諸軍一處に打寄せ馬に乗入ニ流と切つて押渡る
向の岬と守居たる城兵ども一々くも支つて城へ逃入
けり寄幸ハ安ニと江と渡りて残らば向ふに著き其夜ハ
江邊に陣を取り翌十五日早天に城外に押寄せて岡の聲
を攀ぐりも城中静まりて之は音もせび扱ハ夜よま
かれば暗く落失たつたの又ハ謀りや有らじと暫く猶豫し
々るが猶も心れなく思ひくれハ諸將軍士と傍らある

牧丹峯に登せ城中を窺せたるも小きも落共しと見ら敵
一人も無く寐寔たればと碎のびて平壤城と乗取ぬ
此所より兵糧と數萬石を置きたるは日本人の手で
入小くもいづれ城壘と攻め築き各持口と守り敵を禦ぐ
備なりと云

朝鮮初め日本の軍兵分つて江沙の上小駈より陣所十餘
屯と作て草と結びて幕を居たりと既よ曩日と徑れ
とも江と渡る事を得ば警備頗る急めの金命元等城上
より望み見て以為夜に乘ぎて掩蔽を以て精兵を以
て擇り高彦伯等とてこれを領せしめ浮碧樓の下に

る倭羅渡より潜小船より渡りけし初めは其夜の三更
事とくつとむと約したるの免角とて時刻はくれ既に
江と渡る比ハ昧爽となりぬ然とも諸軍の幕中と見る
は敵未起とてこれを進むと茅一の陣に突て入る敵も
猝の事とて驚き擾る朝鮮勢より多くは倭兵と射殺し
中にも土兵伴旭景先登り力戦して遂に倭兵の為に殺さ
る此駈ぎる倭軍の馬三百餘匹と奪いぬる處は程な
く諸陣の日本勢悉く起り立大よのめくれは朝鮮勢も
退き走り還りて船を乗らんともくれども船中の人を
敵の已に後ろより迫るを見て中流より敢て船を寄せしめ

ハ溺死する者甚衆、其餘の軍勢王城灘より流氷を横小
 まるく渡りて、八日在勢始りて水浅の流るべき處を知
 り、日暮に衆軍奉て王城灘より渡りて、朝鮮の灘を守
 る者敢て矢一川も放さず皆散りて逃走る日本勢ハ江を
 渡りても猶城中の備ありし事と疑ひ、遅回て前よりけ
 り是夜尹斗壽金命元は城門を開き盡く城中の人を出し
 軍器火砲と風月楼の池水の中を沈め斗壽等普通門より
 出て順安とさして落るる日本勢ハこれと知る者なく
 一人も追掛る者なり、従事官金信元擲て大同門と出て舩
 に乗て流るに従ひ江西さして落るる、明日敵軍城外に至

了牧丹峰に登り良久く觀望し城空く人無きと知り乃ち
 城を攻入りて、最前王國王平壤に至り評議し皆糧
 餉事欠く事と憂へ盡く近邊村々の年貢と取り平壤に
 運送せしむ城陥るふ及びで本倉の穀十餘萬石皆敵の物
 とたすぬ、此時柳成龍が註進博川に達し又巡察使李元翼
 従事官李好茂も平壤より來り倭軍江を渡りたれや、以
 と云ふゆゑ其夜國王及び内殿も發駕ありて嘉山一向を
 る世子ハ廟社神主と奉て別は他路より發足ありけり
 抑國王平壤と出らば、人心崩潰過る所、乱民共
 輒ら倉庫を押し入り穀物と搶掠め順安肅州安州寧邊博川

此處に皆くうくの如く散くくをかりくくを斯て國王
 ハ義州に至らり。明朝の參將戴某遊擊將軍史儒各々
 一軍の兵を領し平壤に向ひ林畔駐す。至る所の平壤は
 隙と聞て引還し。義州に駐する明朝の軍を搗ひ銀
 二萬兩と贈ふ。唐宮を領し。義州に至る。是より先き
 遼東より人々を明國に遣く。日本人朝鮮を攻むの憂有る
 を註進ひ。とも評議をまぐ。異同あり。或ハ朝鮮日本
 の為小向導とす。の疑ひもたせられども。兵部尚書石星
 意を銳し。朝鮮一救援の兵と出さふ。と云ふ時。朝
 鮮の使刺點たる者。玉河館に有る。と石星これと庭に呼

出。遼東より憂を報ぐるの文書を出し。これを示し申
 照聲と放て号慟き使節の一行の人と朝夕大に泣き悲し
 接兵と出されむ事と請ひ。石星これと哀し。己は
 奏て二軍の兵と一國を衛り。我為軍用銀とも請
 ふ。及ぶ申點。己は回る。通州に至る時。急難と告る
 使ひ鄭嶷壽継で至る。石星引て火房と土よて塗。上下
 の室。柴藁等を焚きて寒を防く。入る。つづ。使事状を問
 ひ。或ハ流涕に至る。と云ふ。此ら。至る。ハ連。朝鮮よ
 使を遼東。差向。け急を告。げ。援。い。と。請。且。中。國。に。内。附。内
 籍。入。て。附。從。む。と。云。事。なり。せむ。事。と。云。蓋。一。日。本。勢。已